

大下藤次郎三回忌追悼会における森鷗外

——新資料「大下氏の追悼会へ（雑司ヶ谷と上野）」（鵜澤四丁）を読む——

酒 井 敏

はじめに

森鷗外の『大正二年日記』十一月の項に以下の記載がある。

九日（日）。陰。午前長田秋濤来話す。午後上野精養軒にゆく。大下藤次郎の三回忌辰なり。記念演説を請はれて応ず。帰途同屋内なる安田稔の展覧会を訪ふ。小金井良一紹介して稔と語る。

例によって淡々とした寡黙な記述であるが、このほど刊行された『文京区立森鷗外記念館所蔵森鷗外宛書簡集3』
う お 編（同館 二〇二二年一月。以下『宛書簡集3』と略記する）を参照すると、その行間を豊かに読み拓くことができる。

その旨みは、日記の記述がどのように紡がれたかを考える手掛かりを与える一方、鷗外の素顔や周囲の人間関係、さらに当時の文化状況の一斑を照らし出す。『宛書簡集』の面白さが増し、研究上の価値も高められよう。

まず、「書簡番号五 鵜澤芳松葉書」の引用から始めたい。

一 鵜澤芳松の葉書と人となり

本文は以下の通りである。⁽²⁾

拝啓比間八とりいそぎ御挨拶もしまして帰りまして失礼いたしました大下君の追悼会にて友人寺山星川君の悲惨なる死を思出で感慨に堪えませんでした

比間の追悼会の模様を今度のみづゑに書きましたが何れ誤りもありましたと存じます豫めお詫をして置きます
まず繪八青梅のこのころです御一笑までに

「繪八青梅のこのころです」とある通り、裏面は水彩の自筆風景画で、鵜澤は青梅在住。中景に描かれた大きな屋根は、追悼会でも話題になる大下ゆかりの宗建寺かも知れない。

寺山星川は、明治二六年五月から「しがらみ草紙」と合併した『城南評論』の主筆だったが、鷗外の「明治四十二年日記」に「寺山星川が発狂して病院にあるを聞く。」(二月二二日)とあり、翌年三月三日に柏木の自宅で神経衰弱のため亡くなっている。盛会だった「大下君の追悼会」との対照で、一際「悲惨なる死」として思い出されたのだろう。鵜澤が最期まで「友人」として交際していたことも読み取れる。

「比間の追悼会の模様を今度のみづゑに書きました」という予告の通り、翌月(大正二年二月)刊の『みづゑ』第百六号に、鵜澤四丁の署名で「大下氏の追悼会へ(雑司ヶ谷と上野)」が掲載された。「記念演説」はもちろん、追悼会の席での鷗外の言動を詳細に記録した新資料であり、その紹介と分析が本稿の主なモチーフである。⁽³⁾

とは言え、それに取りかかる前に、鷗澤の人となりに触れておかねばなるまい。既に『死書簡集³』に人名注を掲げているので、そこに記せなかつた点を中心に進める。

鷗澤は今日では専ら俳人として知られ、銃獵に同行するなど、尾崎紅葉とはかなり親しかったようだ。⁴ 大下の義弟・宮嶋資夫が「又当時、青梅鉄道の青梅駅長であつた、鴉沢四丁は俳句の大家であつた。」と記しているように、大下とは明治三三年に青梅で知り合う。青梅鉄道が開業した明治二七年一月から住んでいたわけではなく、駅長就任に合わせて青梅に転居したものが、「俳句の大家」と書かれたのは、既に俳諧関係の著述を公にしていたからであろう。⁵

大下との交友については、「みづゑ」が非常の景気（『みづゑ』明治44年11月、大下藤次郎追悼号）で初対面当時を回顧して

顧みると、大下氏と知己になつたのはもう十二年も前でした。氏が十二月の末に画囊や三脚を携へて、青梅に僕を訪ねてくれた、氏は自分の名刺を出して、自分は田山花袋君の友人で、こういうものです、何卒よろしく。新年へかけて、この辺の写生をするつもりだといふ事でした。

と記し、さらに以下のように自身が水彩画を描くようになった経緯を述べている。

大下氏は翌年の春過ぎに青梅へ移つて、千ヶ瀬の宗建寺に居を卜された。殆んど毎日のやうに話しに行く、とうとう僕も画を初めることになつた。

その後、大下は欧米旅行のため一度青梅を引き上げるが、帰国後「青梅に移つて暫く静養したいと」鷗澤に相談、ちょうど「隣家が明いて居たので」明治三六年八月に「引つ越して来」た。これ以後、大下の一人息子正男と鷗澤の子供たちが遊び友達になるなど、家族ぐるみの交際となつたらしい。⁶

そして、『みづゑ』の創刊にも大きく関わるることとなる。一緒に「写生に出掛け」るようになった二人は、以下のように語り合ったと言つ（引用同前）。

写生の道すがらには必ず近き将来に水絵の雑誌を出したい。活字はこう絵はこう等と自分の思ふ通りのものをやつて見たい。これが僕の理想の一ツだと話して居られた。体裁もかう包み紙もこうとまで相談を受けた。それは至極面白い是非おやりなさい、僕も及ばずながら尽力しましやう、材料も今からばつ／＼集めて、翻訳するものにして置かうと話しては希望に熱して二人で家路に著くのが例であつた。

また、創刊十周年記念号（『みづゑ』¹²⁵ 大正4年7月）に寄せた「一と昔」でも、

この雑誌の創刊前には大下氏は青梅に居られたので、共々写生に出掛けると必ずこの雑誌発刊の計画を語り合ふた。紙質は現在にある雑誌より優等のものにし活字なども全部六号を使用するといふのも大下氏の理想だつたのです。今みづゑは紙質も換へず六号を使用して居るのを私は嬉しく思ふて居ます。大下氏は微力な私にも雑誌経営には是非力を貸して貰はなければならぬ。そう／＼自分ばかりのいふ事もあるまいし、且つ欧州の水絵画家の伝記紀行、画法其他の翻訳は是非君の手を煩はしたいなどいふて居たのでした。

のように、より具体的に同様のエピソードを記し、大下の希望に沿つて早速「翻訳の筆を執り初め」「パーソンの日本紀行などは私は非常な興味を以て翻訳した」と続けている。ここに回想されている通り、鵜澤は創刊号からパーソンの「富士山」を翻訳連載し、その後も大下の存命中は主として翻訳の寄稿を続け、没後には大下の紀行随筆「三脚物語」を引き継いだ「続三脚物語」「続々三脚物語」を大正三年二月まで連載、さらに同趣向の「靴物語」の連載を翌四年一〇月から開始するなど、大下の遺志を継ぐように盛んな寄稿を続けた。

このように、実は、鵜澤は『みづゑ』の創刊に欠かせない大下の協力者・同伴者だったのであり、以後も出発

期から大正の終わり頃まで有力な寄稿家として本誌を支えている。「アマーチユア^⑩」であり続けたためか、水彩画家として言及される機会はめったにないが、鶴澤は『みづゑ』において重要な地位を占めていたと言えよう。小島烏水や石井柏亭など錚々たる顔触れと並んで「一と昔」が肖像写真入りで掲載されているのも、後述のように追悼会で「大変な高上り」と当人が恐縮するような高い席次を与えられているのも、むしろ当然とさえ映る。

二 一 一月九日午前中 「供養」と秋濤の来訪

一 一月九日に大下の追悼会が開催されることは事前に報道されていた。前日・八日の『萬朝報』「文藝消息」欄に、以下の記載がある。

大下藤次郎氏の墓が新しく雑司ヶ谷墓地に建つた、孤雁、晚霞、烏水、鷗外氏等が発起で、九日墓前に供養を営み、午後一時から上野精養軒で三回忌追悼会を催すと会費一円半

占めているスペースこそ狭いものの、「文藝消息」欄は一面に掲載されている。会費まで記しているが、この記事を見た『みづゑ』の読者の一人が会場に赴いたとして、当日でも参加できたのだろうか。会の背景が窺われる資料であり、これを見ると、鷗外も「供養」に列席した方がふさわしいように思える。

しかし、鷗外は在宅して長田秋濤の訪問を受けていた。『宛書簡集』の「書簡番号五四 長田秋濤葉書」を参照すると、これが予告された訪問だったことが分かる。

拝啓／今朝上京仕り候 有楽町日比谷ホテルに宿取申候 両三日中御伺申上候／敬具

一 一月七日付だが、当時の郵便事情なら、返事を書いて九日の予定を知らせられたかも知れない。それができ

なかつたのは、ちょうど鷗外が多忙を極めていたからであろう。¹²⁾

例えば、八日の日記に「聖上文部省展覧会に臨ませ給ふ。洋画説明の任に膺る。」と記された大正天皇の行幸。追悼会当日・九日の『東京日日新聞』が「昨日の上野御幸」の見出しで報じた中に

西洋画室にて森博士の説明申し上げしに風景画の中にて石川寅治筆「港の午後」中川八郎筆「おだやかな朝」等に御興深かりし如く……(中略)……十時三十分諸員奉送の中に御退出

という一節がある。文展だけが天覧の栄に浴したわけではないが、諸新聞がごぞって同趣の記事を掲載した晴れの行事だった。四日の日記に「午前文部省にゆきて八日聖上を展覧会に迎へまつる準備につきて協議す。」と記されているように、鷗外も周到に準備して臨み、恙無く終えるまで大変な緊張を強いられたであろう。

一四日の日記に「長田忠一晚餐会をCafé Primtempsに催す。予も往く。」とある「晚餐会」への招待が秋濤の目的の一つだったのは確かだろうが、いずれにせよ話が弾んで、鷗外は精養軒の「追悼会」に遅刻してしまった。後に見るように、事実を正確に記すなら「来話す。」に続けて「ために午後上野精養軒の太下藤次郎の三回忌辰に遅参。」とでも書くべき状況になったのである。秋濤逝去の報に接して「弔詞」を送ったり、谷中斎場で「葬儀に列」したりしているように¹³⁾、今日想像されるより鷗外は秋濤を高く評価し、親しく交際していたのかも知れない。

対して、鵜澤は「供養」に列席するため、

朝起抜けに五時の一番列車で新宿に下車して一寸と訪ねる処があるので二軒ばかりを訪ねてから電車で江戸川へ向ふた。¹⁴⁾

青梅発「五時の一番列車」は五時五〇分に立川着、一〇分の待ち合わせで六時五分発中央本線(院線・現在の

JR)に連絡、新宿には六時五九分に着く。¹⁵それから用事を片付けて市電で江戸川橋へ出、徒歩で雑司ヶ谷へ向かう。不在は承知だが、せつかくの機会と「道順」にある目白坂の大下宅に寄ると、そこで「未見の友」だった小島烏水と道連れになる。しかし、途中で道に迷ったりした二人の到着は、まさに供養を始めようというタイミングになってしまったようだ。

中学のユニフォームを着けた正男さんが私等を見て休憩所の方へ飛んで帰って私等の来たのを知らせたらしい。白襟黒紋付の未亡人に御挨拶が済むと、大概お顔振れが見えましたから、始めて貰ひまじやうと未亡人は正男さんを連れられて墓地へと向はれる。

それから読経、焼香、説教があつて、「十一時少し過ぎ」に「己がじ」に上野へ向ふことになった。

鶉澤は終始丸山晚霞と同道して、池袋まで徒歩、そこからは「電車へ乗込み大塚」經由で会場に赴いている。この「電車」は市電ではなく、呉服橋から上野まで「C」の字形に運転されていた鉄道院所管の電車であろう。¹⁶池袋から大塚經由で上野まで、二二、三分の所要時間である。¹⁷

供養に出席した「お顔振れ」は明記されていない。しかし、文末に追悼会の出席者が列挙されているので、参照しながら整理しておこう。¹⁸

了りに今日ご出席のお名前を申し上げますと正面が戸張孤雁、鈴木秀彦、鶉澤四丁、森林太郎、鈴木真、平木政次、磯部忠一、石井柏亭、白瀧幾之助、大下正男、全春子、丸山文之助、森島いそ、小林ふさ子の諸氏で右側が小島烏水、宮島文雄、南繁則、佐藤恭次郎、田中猪太郎、仙葉、池田治郎吉、寺田勇一、渡邊六郎、後藤工志、宮島龍雄、中島石松、赤城泰舒、川村一郎、加藤竹三郎、小林福太郎、桑田信子、津田常子、田澤操の諸氏で、左側が相田直彦、瀧澤邦行、田中太郎吉、佐藤卯兵衛、大橋康邦、菊地鑄太郎、真野紀太

郎、丸山晩霞、市川七作、加納作次郎、水野以文、高橋虎一、岡田武彦、小瀧定次郎の諸氏で合計四十七人。この内、小島烏水・大下正男・同春子・大橋康邦・丸山晩霞・文房堂主人（池田治郎吉）、さらに「據処ない」事情で追悼会は欠席した石川寅治・相馬御風・中川八郎を加えた九名は名前が記されており、間違いなく供養に出席していた。もっと大勢が列席していたのは確実だが、「未見の友」が多い中で名乗り合っ機会もなかったのだから、いたし方あるまい。追悼会では、大下の肖像写真や作品の「三色版絵八ガキ」などの「記念品」と並べて「席順の名紙」がセツトされていた。

逆に、精養軒で「受付に居」た内弟子の赤城泰舒は、供養には列席できていまい。鷗外同様正面に席がある石井柏亭や戸張孤雁も、追悼会からの出席だったようだ。遺族や親族を除くと、正面の着席者は招待客で、おそらく鷗外が主賓だったのだろう。身内同様の親しい関係でもあった鵜澤が例外で、多くは供養に出席していまい。まさに多士済々、太平洋画会の画家たちを中心に多様な分野で活躍している人々が集い、参会者について詳述する余裕がないのが残念である。当時の画壇で大下が占めていた位置の大きさや交友圏の広さが窺え、だからこそ鷗外が「記念演説を請はれ」たのだと言えよう。

三 鷗外の遅参と安田稔

開会を待つ間、「お隣の室には安田稔さんの油絵展覧があるので、その方へ見に行かれた方も大分にあ」つたと言つ。「帰途同屋内なる安田稔の展覧会を訪ふ。小金井良一紹介して稔と語る。」と記しているように、鷗外も散会后に足を運んでいる。

い。主賓抜きで会食を始めるわけにもゆかず、「おあずけ」を食わされた参会者一同も似たり寄ったりだったはずだ。

すると、気を利かせた「小島さんが博士は只今お宅を出られた、お宅は団子坂ですから」と鷗外の到着が間もないことを告げる。電話で確認したのだから、出前を催促するやり取りさながらで、どこか微笑ましい。ちなみに、明治時代の電話帳を繰ってゆくと『明治四十一年七月改東京電話番号簿』（東京郵便局）から「下谷 九四六 森林太郎 本郷、駒込千駄木、二一 官吏」が登場する。

当時、「お宅」＝現在の森鷗外記念館からは「団子坂下」で市電に乗り、精養軒の下（「上野東照宮下」か「上野天神前」）へ出るのが自然であろう。徒歩だとしても、私の足で三〇分ほど。明治人鷗外の足はもつと速かつたろうから、急げば二〇分もかかるまい。

やがて森博士は例の軍服姿で見えた。どうも遅くなりました、と未亡人に申されながら、席に着いて石井柏亭さんと白瀧幾之助さんとを見られて、いや、いや、と腮をしゃくられた。長田秋濤といふ男が久しぶりでやつて来たものですから、つい話が長くなつて遅くなりましたと仰有る。

まさに秋濤の来訪が鷗外を追悼会に遅刻させ、参会者一同にひもじい思いを強いたわけだ。先のように記した所以である。

四 席上座談 鷗澤と鈴木真

続いて、鷗外は鷗澤の方に向き直り、以下のように語りかけた。

鵜澤さん、大下君と青梅に居たことがありましたね、それ何寺とかいふて、ちよつと忘れたが。近頃は何も書かないですか、何か雑誌には関係はないですか、あ、さうですか、俳句の雑誌に。俳句も碧梧桐全盛といふ有様じゃないですか。そして虚子も何か初め出したじやないですか。あの大野洒竹といふ男、我輩と全業だが死にましたね、惜しい事をしました。あの蔵書はどうになりました。あさうですかとにこ／＼して居られる。その内に料理が運ばれる。

博士はまた語をついで大下君の年譜を書いたので、今度は伊藤左千夫の年譜を頼まれて二三日かかつて書きましたよ。この男は大下君よりは努力家だね。小さい時に牛乳屋の小僧をして勉強をしたといふのです。

名乗られなくても、すぐに「鵜澤さん」と語りかけており、内容や口調も以前から面識があったと想像させる。今日まで鵜澤は鷗外研究の関心の外に置かれてきたが、かいなでの交際とは思われない。むしろ、親密で打ち解けた印象の話しぶりと言えよう。

鵜澤は自分の席が「正面の森博士の隣」だと知って、「何だか大変な高上りのやうな気がしてならなかつた」と記している。しかし、それは大下との関係や「みづゑ」に占める位置だけでなく、喪主側が主賓との近しさにも配慮したからであろう。鵜澤は謙遜しているが、実は受当な席次だったわけだ。

この年、鵜澤は「続続三脚物語」の連載を中心に、毎号「みづゑ」に執筆している。それを知らない鷗外には「みづゑ」との接点がなかったと言えよう。それを察したことも、「大下氏の追悼会へ」の掲載を予め知らせた理由の一つだったかも知れない。あるいは、ここで鵜澤と同席したことが、翌大正三年一月号の「みづゑ」巻頭に鷗外が「年頭所感に代へて」を寄稿するきっかけになったとも考えられよう。⁽²³⁾

鵜澤が答えたのは、おそらく俳誌「木太刀」⁽²⁴⁾だったと想像され、そこから話題は俳壇の状況に移る。明治「四

十一年頃から、まったく俳句を離れ写生文的小説」に専念していた虚子が、「全国を風靡するに至つ」ていた碧梧桐らの「新傾向俳句（十七字破壊 季題無用・酒井注）に対して立った」のが、まさに大正二年²⁵であった。「春風や鬪志いだきて丘に立つ」（二月一日・三田俳句会）の句は、その心境を詠んだものとして名高い。もうしばらく碧梧桐優勢が続くものの、ここでは未だ「何か初め出した」程度だった形勢はやがて逆転する。俳句史上外せないポイントとなる、この年最大の俳壇トピックを正確に押さえていると言えよう。虚子と接点があったのは確かだが、鴈外は俳壇の動向にもなかなか鋭い観察眼を向けていたのである。

「我輩と全業」だった大野洒竹は、秋声会の一員であるとともに、東京帝国大学医学部で土肥慶蔵に学んだ皮膚科の医師²⁶。ほんの一月ほど前・一〇月一二日に亡くなった。逝去から未だ日も浅く、この日がちょうど四七日（しなぬかノししちにち）の忌日に当たる。そんな巡り合わせも、「惜しい事をしました」という感慨につながっていく。洒竹は中学時代から精力的に古俳書の蒐集に努めており、その一斑を『しがらみ草紙』に発表していた。そんな所縁もあって、蒐書^{コレクション}の行方が気にかかっていたのだろう。鵜澤の答えは記されていないが、洒竹の蒐書は大正五年に東大国文学研究室に寄贈され、関東大震災の焼失から免れた約三〇〇〇部が、洒竹文庫として現在も東大総合図書館に所蔵されている。

次の伊藤左千夫²⁷も、この年七月三〇日に急逝した。この話題転換には、「大下藤次郎年譜」だけでなく、洒竹からの連想も働いていよう。「伊藤左千夫の年譜」Ⅱ「伊藤左千夫年譜稿」は、六日後・十一月五日付で刊行された『アララギ 伊藤左千夫追悼号』（第六卷一〇号）に掲載された。末尾に「此年譜稿は専ら古泉千樫君の蒐集せる所の資料に據りて作る。ノ大正二年十一月八日ノ林太郎識す」との識語があるから、前日に書き上げたばかり。これも大変ホットな話題と言えよう。

干櫓は同号の「編輯所便」で、「森先生には非常にお忙しいところを特に年譜を書いていただきました。」と記し、錯誤などは全て「甚だ不十分な」「材料」しか提供できなかった「私の罪」であるとして、鷗外の文責を免じている。⁽²⁸⁾ いつ執筆を依頼されたのかは不明であり、秋濤のところまで言及したように、この頃の鷗外は多忙を極めていた。それは干櫓が謝辞に記した通りなのだが、だとしても、僅か「三日」で書いていたと知ったら、どう思っただろうか。

「大下藤次郎年譜」の方は、「日記の取調に着手」してから十日で書き上げている。⁽²⁹⁾ 「伊藤左千夫年譜稿」と比べると、少しは余裕がありそうだ。しかし、「阿部一族」（『中央公論』大正2年1月）の脱稿は、「大下藤次郎年譜を作り畢りて、春子に報」じた翌日・大正元年一月二十九日である。起筆の日は特定できないが、当然、並行して執筆していたであろう。なお、「阿部一族」と同じ月には、藤次郎の手記「ぬれきぬ」を材源とする「ながし」を『太陽』に発表したのを始め、翻訳六編を諸雑誌に発表している。自転車操業と呼びたくなるような矢継ぎ早の執筆を強いられていたのであり、その結果でもあるうか、先に注記した正男の命名の由来や太平洋画会の創設年次など、書き急ぎと思われる不正確な叙述を免れていない。

提供された「資材」の裏を取るなど、本来、年譜の作成には長い時間が必要であろう。粗探しをしようとしているのではなく、鷗外と言えども無理なものは無理、と確認したいのである。本音や裏話を通して、人間的で親しみやすい鷗外の横顔が窺えるわけだ。構えない座談だからこそその面白さであり、鶴澤との親しさの証でもあると言えよう。⁽³⁰⁾

博士はお隣の鈴木老人に向ふて、絵もだんぐ変遷して来る、この大下君の先師に原田直次郎といふ人があつた。この人は私など、一しよに歐洲へ行つて、日本に帰ると、これが新しい画家であつた。それから黒

田君などが帰つて来るともう原田君が古くなつた。それがその新しかるべき黒田君がこの頃は人が古いといふて居る仕末だ。何処までも好い絵は好い絵であるが、時の流行が變つて行くのですね。と話される。

今までとは反対側に顔を向けたわけだが、「お隣の鈴木老人」は、席次によれば鈴木真。「明治三十四年日記」に「○新に獲し友には蒲原（有明・酒井注）氏、豊田氏、横地氏、鈴木真氏等あり」（交友）の項とあり、以後も日記に折々登場する。中でも翌年七月八日に「欧米漫遊の旅券出願す鈴木氏を証人に依頼す」と記されているのが注目されよう。³³ 美術界や鷗外との関係など、履歴や人となりを詳らかにできないが、ここで「鈴木老人」と書かれているように、年長の「友」として信頼を寄せていた人物と思われる。

常に新しさを求める洋画壇の「流行」の「変遷」が話題になつて居るが、既に「原田直次郎」³⁴などに書かれている原田と黒田の例はともかく、その黒田を「人が古いといふて居る」と觀察している点には注意しておきたい。例えば、前年五月の『中央公論』に発表された「吃逆」冒頭には「倒さにして見ても同じ」と秀麿が評した綾小路の絵が「売れた」と書かれていた。鷗外が「ポスト黒田」、彼を「古いといふ」美術界の動きに関心を持つていたと知れば、枕として読み過ぎすわけにはゆくまい。そして、鷗外は実際、そのような動きの中に身を置いていた。

五日前・四日の日記に

朝陸軍省に有嶋生馬、石井柏亭、梅原龍三郎、湯浅一郎と会見す。新画派運動の事に関するなり。

という記載がある。この後、先に見たように、文展への行幸の「準備につきて協議」するために文部省に赴くのだが、その文展でも新たな動きがあつた。

「審査委員になるべき地位にあつた」藤島武二を始め、矢崎千代二・河合新蔵・永地秀太・寺松国太郎ら「経

歴の古い作家が三等賞^⑤に甘んずる中、石川寅治の《港の午後》(「二」の「昨日の上野御幸」引用を参照)と石井柏亭の《滞船》が、南薫造の《春さき》と並んで第二部(洋画)で二等賞を受賞したのである。二等賞が最高賞であり、南薫造は前年・前々年に続いて三度目だが、石川寅治と石井柏亭は初受賞。美術学校で岡田三郎助に学び、白馬会の会員でもあった(会は明治四四年に解散)南に対し、石川は小山正太郎の不同舎、柏亭は浅井忠や中村不折に学び(美術学校に入学はしたが眼病で中退)、ともに太平洋画会に所属していた。さらに、先に注意を促しておいた安田稔の展覧会、新婦朝者が文展開催中に目と鼻の先の精養軒で凱旋展を開いているのだ。明らかに新しい世代の示威運動^(デモンストレーション)と映ろう。

簡単に総括はできないが、それぞれに権威の揺らぎや「流行」の変化が窺え、大下も設立に関わった太平洋画会が、そもそも黒田を中心とする白馬会に対抗するムーヴメントだったことも思い起こされる。何気ない発言のようであるが、文展第二部の審査主任だった鷗外らしい目配りが背景をなし、この日・この席だからこそ萌した感慨⁽³⁶⁾とも言えよう。

五 席上座談 白瀧の問い掛けに心えて

その内にウエーターはコップにビールやサケ、サイダーをついで廻はる。ホークとナイフの音が雑談の声と人交つて聞こえる。白瀧さんが博士に向つて、実際の御睡眠時間は何の位でございますと問はれる。いや新聞やのいふほどでもないが、二三時間位しか寝ないことが三日位続くが、それから先は矢張り眠いさ。

此間も鉄道隊を見ろといふので、二三時間が三日許続いた上げ旬に、成田から三里塚へ行く軽便鉄道の狭い

小さな箱の中でこと／＼可い工合に揺られて、睡いのなんので、もう堪らないのだ。それに皆澄した顔アツで四角張つて居る中で居眠りも出来ず、いや少しは眠つたかも知れぬよ。沼波瓊音といふ文学士で俳句等をやる男が、近頃さとの本をいろ／＼書いて居るが、詮ずるに総て解決がつかなくなつたら、ぐつすり寝るがよいといふて居る。」旨い事をいふて居るよ。それから伊庭孝といふ男が僕の事を書いてね。昔或処に爺さんがあつた夜寝る暇に草鞋を一足づつ造つた、これがつもり／＼て何千足となつたさうだ。僕もそれと全しだとき。その何千足の鞋を造つて何になるかといふのさ。これには僕も大いに感服した。實際千足の鞋を何の為に造るのだから、考へて見ると分らなくなるね。

白瀧さんが、博士は謡曲などはおやりにならないのですかと聞かれる。いやそついで耳がないのですよ。しかしオペラ協会の発起人になつて居るのは少し変かも知れぬ。これは国民協会の起るときにもこんな役をつとめたが、あの会も成立すれば手を引く、今度はオペラといふ風に僕は取上げ婆さんださうだ。いや取上げ爺さんかハ、。

座が寛いできているとは言え、いきなり「実際の御睡眠時間」を尋ねるとは唐突のようだが、実は下地がある。鷗外が「新聞やのいふほどでもない」と受けているように、一月半ほど前・九月二十四日の『東京朝日新聞』「東人西人」欄の以下の一節に興味を惹かれていたのだらう。

一代に名を成すほどの人は、多くは精力絶倫で勤勉衆に秀でて居る。徳富蘇峰君は夜は遅く朝は早い大抵毎夜四時間の睡眠で元気を恢復し、ソレ以上眠つたことはない。森鷗外君は徳富君以上で毎夜三時間の睡眠で満足しソレもゆるりと眠るのではなく、袴を着けた儘で眠る夜が多い。鷗外夫人も此の良人に劣らぬ勤勉家で、三時間位の睡眠で満足し、多くは帯を解かずして眠る。建部遜吾君も亦勤勉家で、毎夜三時間の睡眠で

恢復し、元氣旺盛である

鷗外が気さくに答えているのは、この記事が出て以来、同じような質問を何度か受けていたからかも知れない。しかし、この「東人西人」は、第二面全八段中の最下段左隅に置かれた囲み記事である。定期的に掲載されるとは言え、つまりはゴシップ記事で、飛ばし読みされてもおかしくない内容と扱いだ。この日の『東朝』は八頁立てだが、当時の読者は、まさに「隅から隅まで」新聞を読んでいたのだろう。現在とは違つメディアとの付き合い方が窺え、情報量と受容のバランスを考える糸口にもなる。一方、『鷗外は眠らない』という類の鷗外神話の起源を考える手掛かりとしても貴重であろう。⁽³⁷⁾

「成田から三里塚へ行く軽便鉄道」での経験は、十日ほど前・十月二十九日の日記に以下のように登場する。

千葉にゆき、演習軽便鉄道に乗る。千葉、八街、三里塚間に敷設せり。三里塚より成田に出で、成田より佐倉、千葉を経て帰る。井上圓治随行者。

続く、「大いに感服した」と認める伊庭孝の鷗外評も、やはり前月・大正二年十月の『生活と芸術』に掲載された「鷗外先生を論ず」の以下の一節を承けたものだ。

先生の今迄せられた功績は、三人四人が寄らねば出来なかつた程の分量と方面とを持つてゐます。しかし大人格を俟たなければ出来ない為事ではないと思ひます。先生の為事は毎夜一時間遅くねて、死ぬ迄に草鞋を壹萬足作つたといふやうなものではないでせうか。

鷗外の受け止め方は、いささか自虐的に過ぎるよつに思える。「追儼」（『東亜之光』明治42年5月）に描かれた睡眠時間を削つての執筆は「矢張り眠い」。それに耐えての「為事」だつたと鷗外自身の言葉で改めて知らされれば、なおさらであろう。しかし、「何の為め」でもなく造りたいから造ることこそが、創造行為の原点であ

るはずだ。鷗外にとつて、逆に知己の言だったのではあるまいか。

伊庭は最初に『フアウスト』（富山房 第一部・大正2年1月、第二部・同3月）の誤訳を指摘した人物として知られるが、「フアウストは先生が出来ない独逸語から反訳せられました。」など、ここでも辛辣で遠慮のない物言いが目に付く。鷗外が伊庭の「語学の才能を」認める一方で、伊庭もこの年「鷗外宅を度々訪れ」ていた。五日前・四日にも鷗外を訪問している。そんな親しい関係に裏付けられたコメントであり、

先生の訪客に対する応対振は、非常に砕けてゐます。坪内博士をお訪ねする時などは、ものを言ふにも気が張つてならないやうな気がしますが、森先生とお話するときは田舎の伯父さんと話をするやうな心持です。

という印象を受けていたのも、隔意なく交際していたからこそと思われる。一部に真偽を確かめたくなるような叙述を含みつつ、一般に流通しているイメージとは異なる独自の鷗外像を描き出しており、同時代人による個人的な鷗外評として一読の価値を持つ。もっと注目されてよい文章であろう。

次の「謡曲などはおやりにならないのですか」も突飛な質問に映るが、漱石や虚子も習っていたように、当時の流行であった。世間話としては自然な話題だったかも知れない。しかし、鷗外は「耳がない」と軽くないして「オペラ協会」に話題を移す。例えば十月五日に「四時渋谷なる本居（長世・酒井注）氏の家にて国民歌劇協会の発式あり。請はれ演説す。」という記載があるように、関連する記述が「大正二年日記」に何度も登場する。謡曲には「耳」ではなく興味がなかったたのである。

発会式で「請はれ演説」してから一月ほど。「オペラ協会の発起人になつて居る」も、やはり最近の話題だった。⁽⁴¹⁾この周辺の日記に「国民協会」は見当たらないが、改めて思い返すと、戦鬪的啓蒙活動の時代から、史伝を執筆し帝室博物館総長を務めた晩年まで、鷗外が幅広い領域でパイオニアとして活動していたと実感されよう。

「鷗外と共に何かが終わった」とする論者もいるが、多くを始動させた鷗外は、我人共に許すイメージの通り、まさに「取上げ爺さん」だったのである。

六 「記念演説」 結びの意味も含めて

最近でも、「場をシラケさせない能力なら、キマジメで愛想のない鷗外よりも、竹二の方が上であつたことは間違いない。」と書かれるなど、鷗外に謹敵で堅苦しい印象を抱く人が多いのかも知れない。しかし、この席でも終始「にこ／＼」と気さくに振舞つていたように、常に場の緊張をほぐす気配りを心がけていたようだ。和やかに進んだ追悼会も、やがて主賓が挨拶する頃合いとなる。自ら謹聴を促しているので、席上で「請はれて応じたのではなく、事前に打ち合わせがあつたのであろう。

それから博士は宴酣といふ頃を見計つて、起立され、スプーンの尻で卓子をこつ／＼と叩かれて「叩かれて」、テーブルトークをなされた。お話の大意を摘むと。

今日は大下君の第三回忌に当るので氏の追悼会をなすが為に、氏の近親、お弟子等及友人諸君がこゝに集り下された。今日こゝで私は大下君の豪らかつたことを述べるの必要はあるまいと思ふ。たゞ氏は日本洋画界に功労ある少数の一人であるといふに止めたい。それで大下君は非常なる努力家であつた。氏の父君は陸軍の御用商人であり宿屋の主人であつた、もつと小説的にいへば「ば」馬宿の主人であつた。そして大下君は幼にして継母の手に生長した。勉強する時にも、例へば一枚の白紙にすら不自由を感じた位に苦学をせられた。」そして洋画に志を立てられてから実に僅かの間に屈指の洋画家となられたには驚嘆に値ひする

のである。それから氏を好く知らぬ人は大下君が何か計画があつて事をして行くのであるといふやうな事を属耳「俗耳？」にしたが。シヨツペンハオエルの哲学に依ると、人の心は意識と智識とに依つて働くものであるといふて居る。或る天才の人は多くは意識のみ働いて、智識が鈍いものであるが、大下君はこの意識と智識とが共に働いた人である。何か計画があるやうに見えたのも、さうでなくて意識の働に外ならないのであつたらうと思ふ。氏の日記などを見ると総ての事が詳しく書いてあつて一年の了には金銭の出納まで記してある。そして一面に於ては絵を描き水彩画研究所の如きにも力を尽された。非常に努力の人であつた。研究所のお弟子等にしても何処までも大下君の画風を続けるのが恐らく氏の意ではあるまい。その絵は何であらうと氏の意旨を受けたものであれば絵はどんなに変化しても氏の意が永遠にのこる訳であると思ふ。この意味に於て、今日こゝで諸君と共に健康を祝しても大下君が地下で黙マム「点」頭かれることゝ思ひますから一同と共に盃を挙げて健康を祝しましやうと結ばれた。それで一同は起立して盃を挙げました。着席して後の話題はいろ／＼に変わりましたがこゝには略します。

前注(3) 同論文で、傍線を付した部分を引用して

これは事務能力に長け、水彩画普及を如才なく遂行した藤次郎に対して、計算高いと捉えた面々が少なからずいたことに対する鷗外の意見であり、移り変わりの激しい美術界の情勢を踏まえたうで、藤次郎の本質や残した功績を的確に言い顕した言葉と言えよう。

と左近充が評しているように、生前から親しく大下の仕事を見守り、多くの「資材」に目を通して年譜を執筆した鷗外らしい、行き届いて充実した内容のスピーチである。鷗外自身を書き起こしたわけではないが、宴席の座談とは次元の違う、言わば作品になっているわけだ。本稿でも引用・紹介を主として贅言は慎み、この「記念演

「説」から意味を生成させる営みは、各々の読者に委ねようと思う。

鶴澤は全体について「誤りもありまじやう」と断っており、「テーブルトーク」¹¹「記念演説」についても「大要を摘」んだと記す。従って、正確さを担保された文章ではないのだが、新たな交友関係や「記念演説」の内容が明らかになるだけでなく、座談のコンテクストをたどることで鷗外の素顔、さらに日記や作品の内幕が窺えて面白く、研究上の貴重な新出資料であると思う。そもそも『宛書簡集3』の編集に携わっていなければ、この資料に出会っていなかったに違いない。現在刊行中の『森鷗外宛書簡集』¹²は、「宛書簡」を収めた資料としてだけでなく、もはや遠景に退いてしまった人々や時代のありように迫る道具^{ツル}、言わばタイムマシンとしても大きな魅力を持っているのである。

注

- (1) 『鷗外全集』第三十五卷（岩波書店 一九八九年一〇月）。以下、鷗外の日記からの引用は全て本巻に拠る。
- (2) 『宛書簡集3』では漢字を現行の字体に統一しているが、本稿では旧漢字で書かれていることが明らかな箇所は旧漢字のままとした。絵柄については同書掲載の図版を参照。
- (3) 鷗外研究の場では本稿が初めての紹介であるが、既に左近充直美が「大下藤次郎の人と文学へのまなざし」（『生誕150年 大下藤次郎と水絵の系譜』群馬県立館林美術館／島根県立石見美術館 二〇二〇年）で本資料に言及、「記念演説」の一節を引用してコメントを加えている。なお、文京区立森鷗外記念館の塚田瑞穂氏のご教示によって本論文の存在を知り、さらに左近充氏には直接お電話でお話を伺う機会も得た。お二人の学恩に感謝申し上げます。
- (4) 『スエッチ行靴もの語り』（高山堂 大正9年5月）に以下のようなエピソードが記されている（愛用の旅行靴が語り手となる

紀行随筆で、文中「主人」と呼ばれているのが鶴澤。「先生」という敬称を用いながらも、堅苦しさを感じさせない両者の交際ぶりが窺われよう。

僕の主人等もまだ絵を初める頃には折があるとな銃を持ち歩いたものだ。一度紅葉先生と雪の朝に青梅まで銃獵に行かれたことがあつた。その頃主人は国分寺に居たので、或る雪の朝に紅葉先生が洋服姿で例の味噌越し帽を頂いて、汽車の窓からひよこ首を出されて、ヤツといふ。主人もコレはと驚いて、今頃何処へと聞くとこれだ〜と銃を見せる。それじゃ次の列車で前後を追ひ掛けますと約して先生は一と足お先へ青梅へ行かれた。主人も早速に支度をして銃を携へて次の列車で青梅へ着くと紅葉先生は停車場前の茶屋でやゝ早い昼食をやつて居られた。何んでも鳥鍋か何かで頻りとかつこんで居られたやうだ。それから二人で日向和田近くの野山で小鳥を随分追廻はした。

- (5) 自伝小説『遍歴』（慶友社 昭和28年8月。引用は『宮嶋資夫著作集』第七卷「慶友社 昭和58年11月」）に拠る。なお、宮嶋と大下の関係については、拙稿「宮嶋資夫と大下藤次郎 『遍歴』と「大下藤次郎日記」」（『中京大学文学会論叢』7（2021年3月）参照。

- (6) 大下藤次郎の「明治三十三年日記」に「○鶴澤氏及び広瀬氏に面会す（十一月三十日）」とあり、同じく「交友」の項に「青梅鶴澤氏も年末新たに得し友の一人なり」とある。引用は、川西由里「資料紹介 島根県立石見美術館所蔵大下藤次郎日記（第3回）」（『島根県立石見美術館研究紀要』第3号 平成21年3月）に拠つた。

- (7) 鶴澤四丁校訂『俳諧文庫第廿編 俳諧逸話全集』（博文館 明治33年8月）が既に刊行されており、翌明治三十四年二月から『俳声』に連載される『俳諧修辞学』も「稿を了し」ていた（昭和八年九月に『俳諧修辞学 附連句研究』として宝文館から刊行）。

- (8) 明治三十三年一月十日生まれ。命名の由来について、鷗外の「大下藤次郎年譜」（『大下藤次郎遺作集』春鳥会 大正元年12月）は「正月生れたるに因りて名づく。」と記すただだが、大下の「明治三十三年日記」「正男日記」の項には「正月に生まれし男子といふのみならず又正しき男子なれかしと願ひて」「正男と名づく」とある。

- (9) 例えば大下の「明治三十七年日記」の「正男日記」の項には「○鵜沢百千さんと毎日仲よく遊ぶ○まゝ事をよくす…(中略)…(六月頃)」「(前注) (6) 川西「同(第5回・最終回)」「同第6号 平成24年3月」とあり、「続三脚物語(一)」「(みづゑ) 明治45年4月」には、鵜澤毛の縁側で正男と鵜澤の息子桃二が並んで座っている姿の写真(大下撮影)が掲載されている。
- (10) 「続三脚物語(一)」「(みづゑ) 明治45年3月」が「○大下先生の三脚子は、前々種々の事を達者に話されて、なか／＼面白く拝見して居りましたが僕は主人がアマーチユアであるから、大抵の日は書斎の側の縁側のつえの棚へ…(下略)…」と起筆されているように、自ら「アマーチユア」を標榜していた。
- (11) この写真でも、『水絵の福音使者 大下藤次郎 評伝』(美術出版社、二〇〇五年二月)掲載の《松戸行記念 一九〇五》でも、鵜澤はなかなか恰幅がいい。正確な身長は分からないが、『^{スウェッチ}旅行鞆もの語り』では「二十二貫(約八二・五キロ・酒井注)の体量」と記されている。
- (12) この辺りの事情には、『宛書簡集3』掲載の拙稿「鵜外は大魚を逸したか 怪人・長田秋濤の間の悪さについて」でも言及している。
- (13) 前者は「大正四年日記」二月二十九日、後者は「大正五年日記」一月九日の記載に拠る。前注(12)の拙論も参照。
- (14) 引用は、前出「大下氏の追悼会へ(雑司ヶ谷と上野)」に拠る。以下、特に出典を記さない鵜澤の引用も同様。
- (15) 庚寅新誌社交益社博文館三社合同『大正四年三月 公認汽車汽船旅行案内』(復刻版 明治大正時刻表 新人物往来社 一九九八年九月)に拠る。三宅俊彦が「解説」で「1913(大正2)年4月1日の時刻改正」「からほとんど変更がない」と述べており、こう推定して間違いなかる。なお、鵜澤は帰路についても宴を了つて食卓を離れたのが午後の三時半である。私は新宿発の四時二十五分に間もないのに驚かされて匆々にここを辞去した

と明記している。同様にたどると、新宿発一六時二五分の中央本線は一七時二二分に立川着、一二分の待ち合わせで三

四分発の青梅鉄道日和田行最終に連絡。青梅着は一八時二五分（次の新宿発一八時でも立川発一九時一〇分の青梅行最終に間に合うが、青梅着は二〇時になってしまう）。後述のルートで上野から新宿までが三〇〜四〇分、精養軒から上野駅まで一〇分としても、掛け値なしにギリギリである。発車時刻や行程を日々精細に記しているのがいかにも鉄道員らしく、鶴澤の性格や人柄も窺われる。

(16) 呉服橋は、現在の東京駅が大正三年末に開業するまでの四年間、その北側にあつた高架の仮設駅。東京駅の開業後、中央本線と接続させた「の」の字形運転を経て、大正一四年に現在「山手線」と称されている環状運転が開始される。

(17) 前注(15) 同書に拠る。

(18) 傍線を付した二名は、この年四月に創立された日本水彩画会の発起者三七名に名を連ねている。最も近い立場で大下の衣鉢を継いでゆく人々と言えよう。なお、以下「大下氏の追悼会へ」の引用に当たって、私に傍線を付したり、適宜「」で句読点等を補つたりする場合がある。

(19) 親族ではあるが、春子の弟に当たる宮島龍雄と文雄は「右側」の席にいる。

(20) 他に『都新聞』は、一月五日に「新帰朝者の美術談」の見出しで文展評とドイツ画壇の現況についての談話を、六日には「消息」欄に「安田稔氏作品展覧会」の見出しで紹介記事を、それぞれ掲載している。

(21) 前注(20)「新帰朝者の美術談」及び「郷土に残る小山正太郎と同舎の画家たち」（新潟県立近代美術館 平成27年1月）に拠る。なお、「安田稔氏作品展覧会」に「石黒男爵発企となり九、十兩日上野精養軒に其作品展覧会を催す」との記載があるのも注目されよう。

(22) 大正六年六月三〇日から番号はそのままで、「下谷」局から「小石川」局に変わる。「大正六年日記」の「新電話開通。小石川九百四十六。」という表記に、鷗外が電話番号をどう読んでいたかが窺えよう。

(23) 「大正二年日記」二月六日の項に「栗山敬三郎の請によりて、文部省洋画審査に関する意見四条を書して与ふ。水画に載せんがためなり。」とある。

- (24) 前注(7)に登場する「俳声」を継いだ「卯杖」(明治三六年一月創刊)を四二年四月に改題した秋声会の機関誌。ただし、「同年一〇月以後、星野麦人が主宰することになり、「秋声会はそこで終わった」とされる(『日本近代文学大事典』)。
- (25) 引用は、大野林火『新稿 高浜虚子』(明治書院 昭和49年5月)に拠る。
- (26) 「三歳下の太田正雄(木下李太郎)は同門の後輩に当たる。以下も含めて、詳細は『宛書簡集3』「書簡番号」二四 大野洒竹葉書」の人名注参照。
- (27) 須田喜代次監修『文京区立森鷗外記念館所蔵森鷗外宛書簡集2 あい 編』(文京区立森鷗外記念館、二〇一九年七月)に、伊藤左千夫の人名注と鷗外宛書簡(書簡番号七〇、七二)が収められている。
- (28) 詳細は『鷗外全集』第二十卷(岩波書店 一九八八年七月)「後記」、「伊藤左千夫年譜稿」の項を参照。
- (29) 以下も含め、この段落に記す日付や引用は「大正元年日記」に拠る。なお、執筆の経緯や経過の詳細は、須田喜代次「果たされた約束 大下藤次郎と森鷗外」(『大妻国文』49 平成30年3月)を参照。
- (30) 太平洋画会の創設は明治三四年(第一回展は翌三五年)だが、「年譜」には「三十六年、…(中略)…是年太平洋画会創立せられ、藤次郎理事となり、後評議員となる。」と記されている。
- (31) 以下に続く「大下君よりは努力家」などの記述は不審である。「記念演説」の「大下君は非常なる努力家であつた。」と矛盾する上、そもそも両者が「努力家」だったことを称揚するニュアンスにならない。おそらく、肉体労働に従事するなど、大下より経済的にずっと厳しい状況に置かれた左千夫が、それでも歌を詠む志を捨てなかつた点を強調する文脈の発言だったと思われる。ただし、「小さい時に牛乳屋の小僧をして勉強をしたといふのです。」もまた、正確ではない。「伊藤左千夫年譜稿」には「明治十八年 廿二歳。」の項に「廿二年に至るまで京浜間の牛乳店に使役せらる。」とあり、「明治廿二年 廿六歳。」の項に「牛乳搾取業を始め。当時毎日十八時間劳作し、同業者中第一の勉強家と称せらる。」とある。

- (32) 前注(3) 同論文が「氣遣いの人らしく鷗外は相手に合わせた話題を振りながら、皆の緊張をやわらげ、適度に宴席を盛り上げる。」と指摘している通り、宴席らしい心配りである。
- (33) 引用は、二件とも前注(6) 川西「同(第4回)」(同第4号 平成22年3月) に拠った。
- (34) 『妄人妄語』(至誠堂 大正4年2月) 収録の際のタイトル。初出では「鷗外茗話 原田直次郎氏」(署名隠流投。東京日日新聞 明治33年2月11〜14日)。後、「訃音を得た時の雑感」と改題して『原田先生記念帖』(編集兼発行者小柴英、明治43年1月) に収録。
- (35) 引用は、二件とも森口多里『美術五十年史』(鱗書房 昭和18年6月) に拠った。
- (36) 「何処までも好い絵は好い絵である」と「不易」の側面にも言及しているところに鷗外らしいバランス感覚が見られるが、ここでは「ポスト黒田」の動きについて述べるに止めた。発言自体をより広い視野から見直すことも含めて、「天寵」(『アルス』大正4年4月) をテーマとする別稿を期すこととした。
- (37) 内田魯庵が「度々鷗外から聞いた」という「人間は二時間寝れば沢山だ」という言葉」(鷗外博士の追憶「内田魯庵著/紅野敏郎編 新編 思い出す人々」岩波文庫 一九九四年六月 引用も同書に拠る。「森鷗外君」の題で『明星』大正11年8月号に初出) が有名だが、前注(5)『遍歴』に、大下から聞いたとする同種のエピソードが記されており、記憶が正確なら明治三二年頃まで溯れることになる。詳細は前注(5)の拙稿を参照。
- (38) 「不苦心談」(『東亜之光』大正2年9月) 参照。
- (39) 引用は二箇所とも前注(27) 同書「書簡番号二一九 伊庭孝葉書」人名注に拠る。なお、「孝」は「こう」と訓むべきである。『出発前半時間』と『チヨコレト兵隊』との上場に就て「『歌舞伎』大正2年10月) には「かう」とルビがあり、伊藤道子も「伊庭孝の生涯と大正期における著作目録稿」(『国立音楽大学研究紀要』47 二〇一三年三月) で「伊庭は『音楽評論』1926年8月号の英語ダイジェスト版にDeokと記している。」と注意を喚起している。
- (40) 例えば、岡本綺堂が「能楽」(『風俗江戸東京物語』河出文庫 二〇〇一年二月)、『舞台』昭和15年10、12月に初出

で、日清戦争以降の能楽ブームについて

薄気味の悪い濁声をあげて、近所隣家を怯えさせる素人謡の連中が近頃おびたしく増えてきて、日暮れて山の手の屋敷町を通行すると、此処の格子や彼処の窓を洩れてしばしばこの怪しげな声を聞く。

と描写している。

- (41) 瀧井敬子「森鷗外訳「オルフェウス」をめぐる一考察」(『東京藝術大学音楽学部紀要』28 平成15年3月)に「国民歌劇協会」という鷗外の記述は間違い。「国民歌劇会」が正しい。」との指摘がある。国民歌劇会と鷗外との関わりの詳細は本論文を参照。なお、瀧井には他に「新発見の森鷗外直筆「オルフェウス」第二訳稿をめぐって」(同前34 平成21年3月)、及び解説・解題『森鷗外訳オペラ「オルフェウス」 グルック作曲』(紀伊國屋書店 二〇〇四年一月)がある。

- (42) 明治二五年から三二年まで存在した「国民協会」を名乗る国粹主義団体を指しているはずもなく、あるいは「国民歌劇協会」(傍点酒井)など、鵜澤の聞きなしに拠る誤解であろうか。

- (43) 木村妙子「三木竹二 兄鷗外と明治の歌舞伎と」(水声社 二〇二〇年五月)。なお、以下の叙述と合わせて前注(32)も参照。

引用は、それぞれ注記した文献に拠り、漢字を現行の字体に改め、仮名遣いは原文通りとするのを原則とした。ルビ等は適宜省略している。

文中で触れたように、文京区立森鷗外記念館より『森鷗外宛書簡集』³編集の機会を与えられたことで本稿の着想を得た。また、執筆に当たっては中京大学内外研究員制度(その他の研究員)の恩恵を受けた。記して感謝申し上げる。